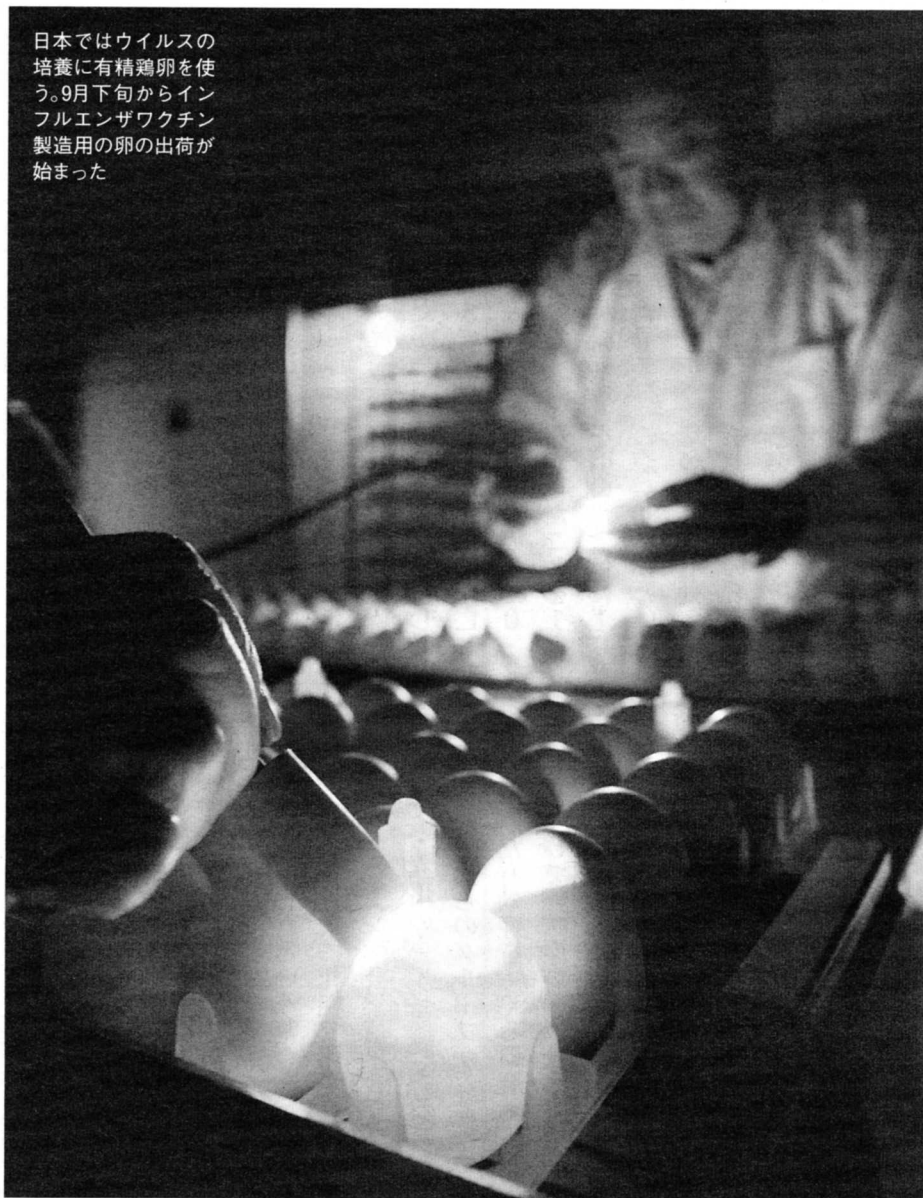


新型インフル対策として有効か

「水のようつな」 日本のワクチン

いよいよ新型インフルエンザのワクチン接種がスタートする。過剰な期待も広がるが、国産ワクチンはその不幸な歴史から、その効果が疑問視されている。

ジャーナリスト 辰濃哲郎、三山喬



日本ではウイルスの培養に有精鶏卵を使う。9月下旬からインフルエンザワクチン製造用の卵の出荷が始まった

新型インフルエンザの「注意報」を示す黄色く塗られた地域が、不気味に広がっている。

国立感染症研究所のホームページに掲載されている「インフルエンザ流行レベルマップ」を眺めると、週ごとにその黄色い地域が一進一退を繰り返している。この黄色が「警報」を示す赤色に覆われていくのは時間の問題だ。

新型インフルエンザで最も大切な防御対策は、ワクチンだと言われている。だが、そのワクチン製造で、日本は大幅に出遅れている。

日本では現在、約2700万人分のワクチン製造が確約されている。欧州を中心とした海外のメーカーが億単位の人数分の製造を見込んでいるのに比べ、その数はいかにも心許ない。当然国産ワクチンだけでは全国民に行き渡らないから、輸入に頼ろうとしている。

インフルエンザウイルス一筋に研究を続け、若いころは民間企業でワクチン開発に取り組んだ北海道大学大学院獣医学研究科の喜田宏教授は、この差を「技術と製造能力と思想の差だ」と言い切る。

新型インフルエンザのために開発されたヨーロッパのワクチン

ンには、「アジュバント」という免疫補助剤が添加されているものが多い。免疫効果を高める物質で、ウイルス含有量が少量でも効果が上がる。その分、供給量は数倍も増えるという。

量も質も「海外」優位

製造方法も違う。日本では相変わらず有精鶏卵でウイルスを培養するため、時間がかかる。ところが海外では動物細胞などを使う細胞培養が開発され、生産スピードが格段に上がった。まだある。

ワクチンには生きた病原体を使う「生ワクチン」とエーテルなどで感染能力を失わせた「不活化ワクチン」がある。こういった不活化ワクチンは血中の抗体を上げるが、ウイルスが付着する鼻やのどの粘膜には抗体ができづらい。海外では、鼻に直接噴霧する経鼻ワクチンまで商品化されている。

アジュバントを添加したワクチンは免疫効果が高い一方、副反応が心配される。経鼻ワクチンの効果も市場に出回ってみるとわからないところもある。だが、海外のメーカーは、効果の高いワクチンを模索して、数々の臨床試験を経て、「この日」に備えてきたのだ。

